貧血状態の高校―中退問題から考える

澤田展人

◇ 序列化の中で余裕を失っている高校教育

「高校はいいぞ」「高校はお前を伸ばしてくれるぞ」など、大人が子どもたちに高校に行くことを勧めるとき、多くの人は、高校について、試行錯誤のできるのびのびとした空間をイメージしているのではないだろうか。

しかし、今、高校は、学校ごとに担うべき役割がきわめて細分化され、効率よく役割を果たすことに汲々とする状況におかれた結果、貧血状態になっている。貧血と言うのは、教育において最も大切な回り道をすること、すなわち、一見無駄なことにエネルギーと時間を割くことへの余裕がなくなっているからである。

多くの高校が集中している都市部の高校を見ると、入試の難易度で学校がずらっと序列化されている。学力上位校は、模試と講習で生徒を常に駆り立て、センター試験と大学入試で好成績を残すことに必死である。それを追う学力中位校は、上位校に追いつくために徹底した進路指導計画を組んだり、部活で成果をあげるために教員が骨身を削って指導に当たったりしている。学力下位校では、大学等の推薦入試と就職試験でよい結果を出すために、服装・頭髪・挨拶のチェックなど生活規律の維持に余念がない。

どのレベルの高校でも、教員は多忙である。よい進路実績や「よい風評」を実現しなければ世間による学校の評価が下がってしまう。そのことは、入学してくる生徒の「質」が下がることを意味し、学校は偏差値で輪切りにされた序列の中を滑り落ちてしまう。もう下がるところのない「教育困難校」の教員の願いは切実である。「少しでも落ち着いている学校だと地域に認識され、よい生徒に入学してもらいたい」ということである。どの学校でも、教員の仕事へのモチベーションは、序列の中で学校の位置を引き上げることである。

ここまで見た状況は学校の役割分化とも呼ぶべきもので、外部の人が見れば、同じ高校と言っても、学校が異なればまるで違う空間であると言ってもいいくらいである。

◇ 高校中退者の増加とその背景

このように学校別に役割分化された高校の状況は、入学してきた生徒とのミスマッチが起きた場合に、対処に困難をきたすことが多い。進学校に入学したが、受験勉強に追い立てられる学校生活についていけず、心の病や不登校に陥ったりする生徒の事例は少なくない。一方、中下位校で、学習の能力はあるのに、服装・頭髪等の生活指導に従うことができずに中退する生徒がいる。「教育困難校」では、学習への意欲がもてないまま怠惰な生活を過ごし、欠席時数の超過により留年、中退へと至る生徒が多数出ている。

高校中退者についての文科省の統計によれば、平成二四年の高校中退者は約五万五千人、全高校生のうちの一・五%という数値になっている。北海道では、平成二五年、一八〇〇人近くが中退している。割合にして一・六%である。現在、札幌では一学年八クラスの高校が多いが、北海道では、この規模の高校二つ分くらいの生徒が毎年、中退していることになる。

中退の理由としては、学校不適応が四〇・〇%、進路変更が三三・三%（平成二四年。文科省統計）の二つが圧倒的な割合を占めている。その他の理由は、学業不振七・六%、問題行動等五・七%、家庭の事情四・五%、病気・けが三・七%、経済的理由一・五%となっており、割合は小さい。

こうした中退の根を探れば、先ほど述べた高校と生徒のミスマッチに突きあたる。現在の高校が、偏差値序列の中で求められる役割に特化しているために、それに合わない生徒が入学してきた場合に、生徒を一個の人間としてとらえて柔軟に対応することが難しい。受験進学校では、大学入試に向けたカリキュラムについていけない生徒の内面を深くとらえてゆっくり対応するゆとりがない。あるいは、中下位校であれば、学校の指導に従わない生徒が、その行為を通じて何を伝えようとしているのか、人間的に対応する機会をもちにくい。いずれの場合でも、学校という場のもつ許容度が小さくなっているのである。生徒集団の中心的傾向からはずれたところにいる生徒に、教員が十分な時間をかけてかかわりあい、内面を理解しながら卒業に向けて援助していく余裕が失われている。

◇ 札幌月寒高校定時制の実践に学ぶ

高校中退者の受け入れ先となっているのは、定時制・通信制高校や高認試験サポート校などである。

この中で定時制高校について若干、ふれてみたい。定時制高校には、中学校時代に不登校の経験のある生徒や全日制高校中退者などが多く入学している。偏差値で序列化された高校制度の中で行き場を失った生徒の、最後のよりどころが定時制高校となっている。しかし、入学者のうちで、不登校や中退の経験者、心の病や発達しょうがいをもつ者が大きな割合を占める定時制高校は、生徒を定着させることについて全日制高校よりはるかに深刻な状況に置かれている。そんな中で、札幌月寒高校の定時制課程は、毎年定員の四〇名を超える応募があり、入学者の七割から八割が卒業に至っている。これは定時制高校の中できわめて高い定着率である。

高校中退問題を解決する指針を求めて、札幌月寒高校定時制に勤務する教員から話を聞いた。以下はその要旨である。

うちの学校は特別ではないね。田舎のふつうの学校といっしょ。学校近隣の子が他に行くところがないから入ってくる。心の病をもっている子も、中退した子も入ってくる。

俺はまず一年生の生徒に言うね。「お前ら、自分のことだけやれ。他のヤツのことをかまうな」って。ほかのヤツのこと気にして動揺したってしょうがないからね。まず、学校に居場所をつくり、学校に来るのが当たり前にならないと駄目なんだ。俺は、生徒にいちゃもんつけるくらいに、絶えず声をかける。他の先生もそうだね。うちの先生は、ほんとによく生徒のことをかまう。

勉強できない生徒はもちろんたくさんいるけど、わかるまで教える。放課後、生徒残してゆっくり教えてやる。こいつ進級難しいなって生徒は、成績会議なんて待ってないで、早いうちからどんどん補習をやる。年間通して、ずいぶん早くから補習してる感じだね。進路指導も、「とにかく受けに行け」と、たくさん面接の練習をして大学や就職の面接試験を受けに行かせる。失敗したらまた受けに行けばいい。

うちの学校には、中学まであんまり相手にされてなかった子がたくさん入ってきている。そういった連中に全部の先生がかかわり、人間関係をつくっていく。三年、四年になると、一年のとき俺にちょっかいかけられて言い返せなかったヤツらが、けっこう上手に俺のいちゃもんをかわしたりしてさ。ちゃんと成長するもんだね。

札幌月寒高校定時制は一学年一クラス、全校生徒一一〇名ほどの小規模な学校である。小規模であるがゆえに、生徒との人間的なかかわりをもちやすい利点はもちろんある。しかし、生徒を一個の人間としてとらえ、粘り強くかかわっていく学校のあり方に、高校中退問題を考える際、私たちが学ぶところは非常に多いと思う。

澤田展人（さわだ　のぶひと）
一九八三年から二〇一四年まで道立の高校に在職。定年退職後、再任用で現在校（北海道札幌丘珠高校）に勤務。網走、夕張、札幌で全日制・定時制の高校を経験。北教組共生・共学推進委員。著書に小説集『魂の歌手』（共同文化社）。